



AΛΗΘΕΙΑ

豊橋技術科学大学附属図書館報

真理とは何か／西永 頌.....	1
書籍・読書・図書館／三浦均也.....	2
私の図書館／阿部英次.....	3
図書館と私／丹下 裕.....	4
図書館と私／杉山香奈子.....	4
図書館と私／古田有貴子.....	5
大学図書館職員長期研修に参加して／江口敏一.....	6
著作権実務講習会に参加して／美野部亜紀.....	7
よくわかる??文献情報ガイダンス!.....	8
オープンキャンパス実施状況.....	9
Information.....	10
図書館の利用状況.....	11
TUT-L NEWS.....	12

特集 図書館と私

真理とは何か

西 永 頌

表題の言葉は、キリストの裁判の場で、ローマの総督ピラトが発した問いとされている。真理はギリシャ語ではアレーテアであり、初代図書館長小林陽太郎先生がこの言葉を本図書館の入り口の壁に掲げられた。

自然科学では、真理は比較的明らかである。物体をいろいろな高さから落としたとき、何秒で地上に達するかは実験により知る事ができ、この結果から落下中の物体に対し、位置と時間の関係を数式で表す事ができる。この様な法則が与えられ、繰り返し実験により確認されたとき、それを真理として認める事ができる。しかし、物体が非常に小さくなると、また別の運動の法則が現れ、真理と思っていた事が、実はある限定された範囲においてのみの真理であった事が古典力学と量子力学の関係において示された。にもかかわらず、自然科学では、真理は比較的明らかといえる。

一方、文学、哲学、思想などといった人文・社会科学では真理は何かと問われたとき簡単には答えられない。ピラトの問いもこのことと関係する。たとえば、どの様な生き方をするのが正しいか、との問いに対し100人が100様の答えをするであろう。与えられた人生を、最も意味あるものとして生きるにはどの様にしたら良いのか、これは、一人一人に問いかけられている。この答えの出し方として最も安易に用いられるのは、身近な友人のまねである。しかし、これは楽ではあるが、独立した個人のすべきことではない。ただ一回しかない人生を、付和雷同的に他人任せにしては悔いを残す。オウム真理教のようないかがわしい宗教に引き込まれた若

者の悲劇を繰り返すことになるのだから。次に、若者が用いる手は、教師に人生の指針を求めることである。かつて、70年代の大学紛争時代、怒れる若者は大学教師に人生の指針を与えよと叫んだ。ところが、はるか昔、マックスウェーバーは「職業としての学問」のなかで、学生たちに教師に人生の指導者を求めてはならないと論じている。というのは、人生にただ一つの真理などというものはなく、教師に求めて得られるものではないからである。

自分の生き方は、自分で探さなければならない。それにはどうしたらよいか。良き教師も含め、いろいろな人生の先輩、同僚との会話を通しこれこそ自分の生き方であるというものを掴むことも出来よう。しかし、直接話を聞ける人間には限りがある。大事な人生であり、もっと広く、もっと深く、生きる意味を知る必要がある。そこで書物が登場する。書物は、時代を超え、国を超え、たくさんの人との接触を可能にしてくれる。その中に、自分の人生はどうあるべきかのヒントが沢山隠されている。つまり、真理は、そのようにして人との対話や多くの書物を通して自ら探ってゆくものである。若い時代、専門書以外に、小説、文庫本、教養書など手当たり次第に多読することをお勧めする。しかし、誤った方向に流されてしまわないため、常に“自分”というものを持ち、批判者精神を持って読む事が大切である。批判者精神は多読により自然に培われる。読み進めるにつれてひとりでの批判の力がついてくるのである。図書館とはその様な良き自我を形成する場所であろう。

(学 長)

情報工学の飛躍的な進歩により、読書は変わりつつある。学生時代はもっぱら書店・古書店の徘徊と図書館通いで本を手に入れていた。しかし、電子書店Amazon.com (co.jp) の出現により随分様変わりした。莫大なデータベースの検索により、欲しい情報がほとんどすべて手に入る。読者からの情報を含めて書評も充実しているし、宮部みゆき、矢口高雄、立花隆、櫻井よしこ、戸田盛和といった私が気に入っている作家の動向を自宅からでも手軽に知ることができる。最近では、過去に検索あるいは購入した書籍の個人データベースを整備しているらしく、たまに本を押し売りされるのが少し煩わしい。でも、送料を気にせずに注文できるし、新刊書が発売日に手元に届くのがいい。電子古書店 EeaySeek もよく利用する。個人の資格で品質の良い本を売買できるのがいい。諸般の事情によりわたしの専門分野の建設工学では自らの血を絞り出すような構造改革を迫られているが、書店も安閑としていられないだろう。

書籍の電子化は、出版社や書店ベースで驚くほどのスピードで進められている。Amazon.com でも、e-Boos が洋書部門で始められていて、何冊かは無料でダウンロードできる。本の体積と質量が消失することによる電子化のメリットは、省資源、環境保護などがまず挙げられるが、出版手続きの簡素化、情報の発信・受信の手軽さが大きいと思う。駆け出しの小説家が自分の作品をインターネット上で無料公開して支持者を得たが、収入が得られず、その後に電子出版界から紙の出版界に転進したという例を新聞で読んだ。著作権の問題が解決できれば電子書籍はさらに急激な広がりを見せるだろう。

最近、論文集が CD-Rom で配布される学会・会議が多くなってきた。昨年までタイのアジア工科大学で教鞭とっていた時、学術文献等の電子化は日本よりも一足早く勤んでいて学生に利用法を教えてもらったことがあった。インフラが整備されていない国でも電子書籍は格段に入手と管理がしやすく、海外からの援助を受けやすいのが理由のようだ。日本でも大学あるいは大学や高専のグル

ープでコンソーシアム形式の学術情報の受信が進められている。情報の電子化が国際的な広がりを見せる中で、我々(日本人)の課題は情報の発信であろう。しかし、活字にして出版するとなると言語(英語)の壁はまだ高い。英語の能力はもちろんであるが、感性の違いが随分と論文の読みやすさに影響しているようである。日本のハードウェアは極めて繊細・高品質であり、アニメやビデオゲームなどのソフトも世界水準をリードしている数少ない分野である。でも、翻訳を自動化する技術はさらに難しく飛躍的な進歩にはまだまだ時間を要する気配である。翻訳そして情報発信を支援する人材、組織の整備は急務であるように思われる。最近の学術業績の評価に関連して citation に impact factor というルールが持ち込まれている。われわれも独自に英語のジャーナルを持つくらいの努力をしなければならないのだろうか。

大学図書館の将来像について、最近の図書委員会で話題提供された。情報の電子化に合わせて、一般には計算機センターと図書館の境界が今後曖昧になり、組織も再編される傾向にあるようだ。省資源化、環境の保護の観点からは望ましく、これにより効率化が図られていくと期待できる。ただ私が気がかりなのは、昔ながらの図書閲覧(読書)室である。そこだけ絨毯が敷いてあり、違った種類の空気が詰められているように感じられた。静寂と、強い集中力を持つものだけが耐えられるあの雰囲気、これは残して欲しいと思う。

(建設工学系 助教授)

私が小学校へ入ったのは昭和22年(1947)年で、太平洋戦争に敗れてアメリカに占領され、六・三制と呼ばれた現在の教育制度が始まった年である。蛇足ではあるが、明治以来続いていた教育制度の大幅な改変が突然この年に行なわれ現在に至っている。窮乏のどん底にあって食べる物にも事欠く時代で、新しい教科書が配られたのは夏休みが終わってからだった様に記憶している。また、敗戦後は旧制度の教科書の不適切な部分を墨で塗りつぶして使ったと聞いた。何しろそれまで使われていた教科書(国定教科書と呼ばれていた)はすべて廃止し、新しい教育制度に沿ってすべて作り直せという占領軍のお達しだったわけだが、深刻な物資不足で印刷できなかつたらしい。

したがって、子供向けの絵本の出版などは思いもよらず、その頃に読んだ(眺めた?)絵本は母親の実家の土蔵から持ち出された大正時代のカタカナで書かれたもので、桃太郎やサルカニ合戦などと一緒に日露戦争の乃木将軍や東郷元帥の話を読んだ記憶がある。

虚弱児童で外で遊ぶことが苦手だったし、テレビなどというものはアメリカ映画の中にしか存在しなかったので、本ばかり読んでいた。隣が本屋だったので、のべつ出入りして立ち読みどころか、座り込んで読みふけていたものである。ここが私にとっての図書館だった。

中学校に入ってまもなく大病をして1年半に及ぶ長期療養を余儀なくされ、その頃ブームになりつつあった翻訳ミステリーの雑誌や文庫を読み漁っていた。その中にはいわゆるSFもかなり混じっていた。その後、高校に入ってから病気がちでこれらの本ばかり読んでいた。その結果、いまだに我ながらかなり偏った読書傾向を持って現在に至っている。

自慢できることではないが、学生時代ついに一度も大学図書館には足を踏み入れなかった。縁があったのは本館ではなく学科の建物に在った分室だった。大正時代に建てられたという古色蒼然とした化学教室の2階にあった。中に入ると建物と同じ位古そうな(失礼!)司書のおばさんが座って

いた。その奥には新刊雑誌がずらっと並んでおり、何時も誰かが読みふけていたり、せっせと筆写(当時はコピー機などというものは図書室にすら存在していなかった!)したりしていた。この図書室には螺旋階段が設けられており、それを降りたところには、製本された雑誌のバックナンバーが保管されていた。中には19世紀まで遡るものもあり、古書特有のかび臭いにおいが充満していた。その中から必要な文献を見つけ出し、せっせと書き写すことでその論文を読んだかのような錯覚を起こしていた。怠け者の学生だったので、教養部(学部1、2年次)の試験の前には友人のノートを書き写すということをしばしば行なっており、書き写すことに関してはベテランになっていた。もっとも書き写すという行為は何がしかを記憶に留められるので、多少の役には立ったのかもしれない。今のように簡単にコピーができてしまうと、それだけで安心してしまうということになってしまいそうである。まして、ブラウザーの画面に次から次へと表示される文字列においては何をか言わんやである。

(知識情報工学系 教授)

図書館と私

丹下 裕

私が大学に入学した翌年(平成10年)、技科大の付属図書館は全国に先駆けて24時間開館になった。私は図書館にいつでも行くことができることに喜びを感じた。課題で分からないことがあるとよく図書館まで調べに行ったが、こんなときに24時間開館の有難さが身に染みて分かった。また、PCやインターネットの普及により、図書館のHPにアクセスして図書検索、文献検索もできるようになった。これらは技科大の図書館の特徴となった。

私の場合、図書館では図書検索もそこそこ使うが、文献検索のほうがメインである。文献検索でよく使うものは論文収録年数が多い「ENJOY JOIS」とすぐに入手できる「電子ジャーナル」である。「ENJOY JOIS」は簡単に検索ができる反面、キーワードに注意しないと必要とする論文を入手することができない。だから、私の場合、考えられる限りのキーワードを用意して検索しているが、見つからないときもある。また、「電子ジャーナル」は、収録論文中に入手したい論文が無

い場合もあり、不便に思うときもある。だが、不便を感じる事のその多くは図書館員の方々が大変な労力を払ってカバーしているようにも思え、利用者にとってはとても有難い。

最後に図書館への要望として、数年前の図書館と変わり利用しやすくなったが、図書館としての価値は利用されてこそにある。今後も利用者の声を聞いて、より利用しやすい図書館になって欲しいと思う。

(機械システム工学専攻 修士2年)

図書館と私

杉山 香奈子

私にとって図書館とは常に身近にあるものである。私は昔から本が大好きだったからだ。絵本、小説、エッセイ等活字であればなんでも読む。小さい頃から、家にある本は限られている、本の代金は意外と高い、図書館に行けば今まで読んだことのない本が読めるという点でよく図書館に通っていた。父の仕事の都合で何回も引越したのでいろいろな町の図書館に通った。たくさんの図書館をみてきた中で一番印象に残っている図書館といえば、K県M町にある小さな図書館である。図書館というより、図書室といった方がよいような本当に小さな図書館であった。図書館の内部に入ると薄暗く、いつもひんやりしていて、少しかび臭いにおいがした。しかし、私はその図書館が好きだった。全体の本の量に対してやけに推理小説が多く、私はそれを全部読破しようと頑張ったものである。(結局無理だったが)私の推理小説好きはそこからきていると思われる。

その図書館には、親切な係の方がいた。いつもそ

の方がやさしく本の場所を教えてくれたり、図書館の貸し出し期限スタンプを押してくれていたことを覚えている。読んだ本の内容は覚えていなくても、けっこうそういうこまごましたことは覚えているものだ。個人的な意見だが、図書館の方の対応が悪かったりするとなんだか行きたくなくなるものである。

今、私は本学の図書館で夜間の業務補助という仕事をしている。以前から図書館の係の人というのに多大な憧れがあったので、友達からそういう仕事があると聞いたときすぐやってみたくなり希望したが、去年は残念ながら無理だった。そこで、今年もう一度チャレンジして現在に至る。憧れはあったものの、図書館職員の方々の仕事をまったく知らなかったのも、なにもかもが初めての体験である。いろいろな事を自分が聞かれる立場になってみて初めて大変さが分かった。これから、私自身自分の体験をもとに感じがよくなったと思われるような図書館の職員になりたいと思う。

(知識情報工学専攻 修士1年)

4年前に入学して以来、私はよく大学の図書館を利用してきました。

私にとって大学の図書館の使用目的は、勉強することにあるにありました。

1、2年生の頃は、数学や物理・化学といった一般科目の授業が多く、その時に分からなかったことや、解けなかった演習問題などを、授業が終わってから図書館に行って調べて理解し、自分でもう一度解いてみたりしていました。ここの大学の図書館には、参考書がたくさんあり、基本的なことから説明してくれているものや、例題がたくさん載っているもの、応用問題がたくさん載っているものなど種類が多いので、その時自分が必要だと思っている自分にぴったりの参考書を見つけることができます。

また、3年生になるとそれぞれの課程ごとに専門の授業がどんどん増えてきます。そんな時も私は、図書館の専門書を利用していました。特に実験のレポートを作成する際には、たくさんある図書館

の専門書から必要な資料を探してきていました。また、図書館のノートパソコンを使用して、インターネットに接続し、必要な資料を探したりもしていました。

それなので参考書や専門書は、3年生までは必要最低限のものしか買うことなく、ほぼ図書館のもので済ませることができました。4年生になった今は、自分の研究分野に関する専門書は自分で購入し、それ以外の分野のものは図書館の本を利用していています。

このようにここの大学の図書館は、参考書や専門書がたくさんあり、勉強に必要な資料が揃っているため、非常に勉強するのに適した場所であると私は思います。

しかし、一般書の数が少なめなので、もう少し一般書を入れて欲しいと思うこともあります。そうしたら、本来の図書館の目的である本を読むということも、もっとできるのではないかと思います。

(エコロジー工学課程 学部4年)



“ΑΛΗΘΕΙΑ”

図書館の入り口の壁に掲げられている銘板のギリシャ文字“ΑΛΗΘΕΙΑ”（アレーティア）は、「真理」を意味します。

表紙デザイン

この表紙のデザインは、野澤隆秀氏（本学卒業生・元建設工学系助手）によるものです。

大学図書館職員長期研修に参加して

江口 敏 一

平成14年7月8日から26日の3週間、大学図書館職員長期研修に参加してきました。初めの2週間が東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで、後の1週間がつくばの図書館情報大学で開催されました。受講者は北は北海道から南は沖縄まで国立大学32校、国立共同利用機関1機関、公立大学2校、私立大学2校の合計37人(男17名・女20名)が参加しました。連日30度を超える猛暑のなか、また7月に台風が2度も上陸するという悪天候の中、一人の脱落者もなく無事終えることが出来ました。

40コマの講義や演習が、大学図書館の管理・運営、大学改革と図書館、電子図書館的機能の整備とその推進、電子的資料の導入、国立情報学研究所の活動、多様化する情報サービス、社会の変革と大学図書館の7つの大きなテーマで行われました。その中で特に興味深かったものを3つあげますと、一つは「業務分担と人事評価」で、実際に企業の経営コンサルティングを行っているトーマツの方による、業務や組織を見直し再構築する方法や人事制度・評価制度について説明を受け、これらを行うのは今まで考えていたよりも相当大変であることがわかりました。二つ目は「図書館のマーケティング」で、図書館職員の自己満足ではなく利用者の満足度を知り、それに基づく図書館サービスの品質評価を行い、利用者はどういうサービスを求めているかを知り、図書館サービスの改善を続けることが必要であることを再認識しました。三つ目は「プレゼンテーション」で、他人に説明する場合つい聴き手のことをあまり考えず自分の言いたいことばかりを言ってしまいがちですが、聴き手ニーズやレベルに合った内容をわかりやすく簡潔に印象深く話さなくてはいけないことや、また服装・姿勢・動き・表情・目線・声など注意しなくてはいけない点も沢山あることを知らされました。

また他の図書館等の見学では、大学図書館では法政大学・東京工業大学・筑波大学・図書館情報大学の図書館を見学させていただき、他大学の図書館の現状を知ることが出来ました。国立国会図書館では館内の見学や資料の保存について説明な

どがありましたが、洋本の皮製本や和装本の修理の実務の見学はとても興味深く見させていただきました。凸版印刷では最新の印刷技術の電子ペーパーや情報流通代行サービス Bitway などについての紹介やバーチャルリアリティラボやデジタルアーカイブや印刷博物館を見せていただき、従来抱いていた印刷会社のイメージが変わりました。TRC図書館流通センター志木ブックナリーでは図書館からの注文の処理・在庫図書の見取り・装備・出荷までの行程を見せていただきましたが、作業場をけたたましく走り回っている無人自動搬送車がお腹が空くと自分で充電している姿をみるとちょっとした生き物(ロボット)のようでした。

講義や見学も大変有意義なものでしたが、それ以外でも他の大学図書館職員との交流により他大学の状況なども聞けましたし、今回一緒になった人たちとの結びつきは人的ネットワークとして今後の業務にも役立つと思います。

最後に、このような有意義な研修に参加させていただきましたことを、長期間ご迷惑をおかけした職場の方々に、また研修でお世話になりました文部科学省と図書館情報大学および各機関のご担当者の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

(図書課学術情報係)

7月24日から26日にかけて、文化庁主催の平成14年度図書館等職員著作権実務講習会(東京会場)に参加する機会をいただきました。東京大学法学部を会場として毎年開催されるこの講習会に、全国の大学・公共図書館等から500人もの職員が集まり、3日間にわたって、著作権に関する講義や質疑応答、演習問題により講習をうけました。

図書館は、さまざまな種類の著作物を取り扱っており、それらを用いて行われるサービスには著作権が大きくかかわっています。特に図書館と著作権との関係で長らく問題とされているのは、著作権法第31条で定める「図書館等における複製」で、著作権者と図書館側の双方からその不備が指摘されています。

権利者側からは、図書館の複製サービスによって生じる著作権者の経済的不利益などが指摘されており、「補償金」の導入などが一部で提案されたりしていますが、必ずしもオールマイティに問題を解決するものではありません。

これに対し、図書館にとっては、法31条の複写行為に関する制限事項が多いことが問題です。

例えば、複写行為の主体は著作権に関する知識のある職員でなければなりません。ほとんどの図書館では、現在の人員配置ではセルフコピーの廃止は実際は難しく、複写範囲の厳重なチェックも、時間と労力を要します。また複写可否の判断も難しく、A館で許可される複写行為がB館では許可されないなど、図書館の判断により、サービスの差が生じることもあります。

特に、大学等における学術研究は、館内でのコピーに加えて、図書館で行う文献複写サービスがなければ成り立たないと言ってもよく、法31条の制限事項の多さは、研究者・学生にとっても大変不便です。

また大学図書館は、公共図書館と異なり、学術資料を主として取り扱っています。このような学術論文は、流通し利用されることがその価値を高めること、論文の執筆者(掲載時に、著作権の一部が出版者に譲渡される事が多い。)が他の学術論文の利用者でもあること、複写文献の多くは外国論

文であることなどの事情から、他館種と一括りにして論じることは難しい点もあります。

全面的な解決には時間を要しますが、大学側と日本複写権センターとで協議が行われており、大学側から複写業務のガイドラインを提案するなど、着実に前進をしていると感じます。

文献複写と著作権問題に関しては、この他にFAX送信の問題があります。これは、FAX送信により利用者に複写物の提供をすることが法23条で規定する「公衆送信権」を侵害しているというものです。加えて最近ではインターネット画像伝送システムによる、ドキュメント・デリバリー・サービスの導入をめぐる「公衆送信権」と「複製権」の侵害が問題とされています。「複製権」については、中間電子複製物の削除によって対応できるものの「公衆送信権」についてはFAX送信と同様、適法でないとされています。しかし、今後ますます迅速な学術情報の流通が求められていることを考えると、一日も早くこれらの問題をクリアし、FAX送信やDDSが、権利者と図書館の相互理解のもとに、問題なく実施できるような体制の実現を望みます。

他にも、最近では電子図書館に代表されるように、図書館を取り巻く環境も大きく変化し、昭和40年代の著作権制定時には予想もできなかったあらたな著作権問題が発生していることを学びました。字数の都合からすべて述べることはできませんが、共通して言えることは、図書館サービスを行う上では、著作権に充分留意し、不当に権利を侵害するようなことがあってはならないこと、その中でより充実したサービスを行うために、何をしなければならないか考える必要があるということです。そのために、著作権法とその運用についてよく理解すると同時に、利用者の方々にも理解していただく努力をしなければならないと感じました。

この度の研修で学んだことを今後に生かし、幅広い視野に立って図書館業務を考えていきたいと考えています。

(図書課学術情報係)

よくわかる??文献情報ガイダンス!

学術情報係

附属図書館では、去る4月22日から5月31日にかけて、研究や学習に必要な情報を収集し、レポートや論文の執筆に役立てることが出来るよう、本学図書館で提供している学内LANやインターネットを通して利用できるデータベース等の利用方法を説明する、文献情報ガイダンスを実施しました。

現在では、所蔵資料を図書館に来館することなく、ネットワークで検索する事ができますし、電子ジャーナルで提供している雑誌については、研究室等に居ながらにして、閲覧したり印刷したりすることが出来ます。図書館の有効かつ多様な利用が可能となりました。また、インターネットの進展により全世界のあらゆる最新情報を入手することが可能です。このように多種多様な情報が取り巻く環境にいらながらも、その探索、入手方法を知らなければ、せっかくの有効な情報も手にすることが出来ませんし、必要な情報を効率よく的確に探索する方法を獲得していれば、無駄な時間を費やすことが防げます。このような目的のために、図書館職員が多忙な時期ではありますが、ガイダンスを行

っています。

実施に当たり、昨年度実施した結果を踏まえ、計画しました。もっとフレキシブルにという要望がありましたので、日程を系毎に固定せずに、自由に選べるようにしました。

また、昨年度は、わかりやすく丁寧にという主旨から、1台の端末でごく少数の人員で実施しましたが、今年度は、プロジェクターを活用し、20名までは実施可能としました。さらに、周知方法も、メールや掲示及び図書館のホームページで行い、申し込み期間も十分にとりました。その結果参加者数は、昨年度169人だったのが、今年度は、延べ190人(実質人数134人)と9%程度増えました。参加者数に関しては、後日、情報検索の方法を何人の方がレファレンスデスクに尋ねてこられたことを考えると、まだまだ参加者の増加を図りたいと思います。

今後の参考とするため、ガイダンス後にアンケートをとりましたので、ガイダンスの実施内容及びその結果を、次に掲載します。

実施内容

1. SweetScan, Enjoy JOIS, 雑誌記事索引のデータベースの特徴及び利用方法の説明
2. CA on CDのデータベースの特徴及び利用方法の説明
3. 電子ジャーナルの種類・内容及び利用方法等の説明

所 属 (人)

1系	2系	3系	4系	5系	6系	7系	8系	9系	無記名	合計
18	27	15	0	8	19	25	19	1	2	134

身 分 (人)

教授	助教授	講師	助手	大学院生	学部生	無記名	合計
1	1	0	2	78	50	2	134

ガイダンスの内容 (人)

役に立つ	少し役に立つ	役に立たない	わからない	無記名	合計
89	30	1	9	5	134

開催時期 (人)

適 当	適当でない	無記名	合計
126	6	2	134

実施時間 (人)

長すぎる	適 当	短すぎる	無記名	合計
16	115	1	2	134

ガイダンスの開催を何で知ったか (人)

教官から	掲示板	図書館ホームページ	その他	無記名	合計
79	24	2	26	3	134

ガイダンス参加の理由 (人)

今後使いたい	使ってわからなかった	何となく	その他	無記名	合計
100	4	11	15	4	134

これによりますと、実施時間が長すぎるという方が16名いたのが気になります。

確かに、ガイダンス中にスヤスヤと居眠りをされている方もおられました。もっと短く絞って、ということも考慮したいと思います。

総合的には、おおむね良好な結果だと受け取っています。

これにより、ガイダンスを実施することは有効であ

ると思われますので、来年度も引き続きこのガイダンスを実施したいと考えています。

よくわかる??ではなく、よくわかる!!文献情報ガイダンスを目指して頑張ります。

利用者の皆様の率直なご意見をお願いするとともに、もっともっと多くの方が参加して下さるよう期待しています!

オープンキャンパス実施状況

情報サービス係

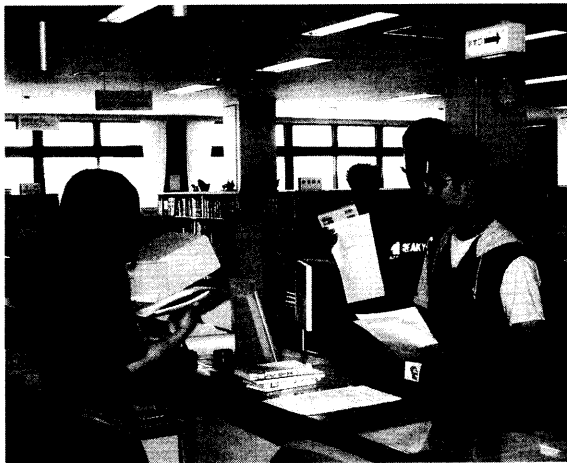
7月28日(日)に本学においてオープンキャンパスが行われ、例年通り図書館も参加をいたしました。好天に恵まれ、また大学で企画した講演会に多数の来場者があったため、全体の入場者は1,019名、その内、図書館入場者は325名と、盛況なうちに無事終了することができました。

図書館では、来館者にインターネット体験をしていただけるよう、パソコンを開放し、パソコン操作に慣れていない方のために職員やアルバイト学生を配置し、対応いたしました。

また今年初めての試みとして、自分で図書を探してみよう、という来館者参加型の企画を実施しました。受付時に参加を募り、希望者には図書館内でそれぞれの課題図書探しに挑戦していただきました。図書の在処を探すために、パソコンを操作してOPAC(蔵書検索)を実際に体験してもらおうのが狙いです。

その結果、私たちの予想をはるかに上回る145名(対図書館入場者44.6%)のご参加をいただきました。捜している図書が小さな子供さんに限って書架の高い段に配架されていたり、別置図書をうまく探せない参加者が多かったりと、いくつかの問題点はありましたが、参加者の方々には、楽しんでいただけたかと思います。数人の来館者からは、「今後も引き続き利用したいが、どうしたらよいか。」などの質問が寄せられたため、企画に併せてカウンターにて学外者利用の受付を行い、利用証の発行をいたしました。

高校生はもちろん、小さなお子さんから年輩の方まで大変幅広く来館していただき、「図書館の地域への開放」といった点からも、オープンキャンパスへの図書館参加は、非常に有意義であったと考えております。利用者各自の生涯学習や、地域の活性化などに役立てていただければ幸いです。



Information

日本語教材コーナーの設置について(情報サービス係)

1階の年鑑・白書コーナーの後ろに、新しく日本語教材コーナーを設置しました。貸出については、一般資料と合計で10冊まで可能です。CD、カセットテープ、ビデオ等も利用できますので、どうぞご利用ください。日本語教材リストの詳細については <http://www.lib.tut.ac.jp/jptxt.html> をご覧ください。

辞書サーバシステム「こととい」について(学術情報係)

「こととい」では以下4つの電子辞書をネットワーク(学内LAN)で利用できます。附属図書館ホームページ「文献情報検索」よりアクセスしてご利用ください。

広辞苑第5版(岩波書店)

英和・和英中辞典(研究社)

コンピュータ用語辞典第3版(日外アソシエーツ)

模範六法2002年平成14年版

ASTM Standards on DISC 2001 について(学術情報係)

ASTM Standards は、American Society for Testing Materials が制定する工業材料および試験方法に関する規格です。このたびASTM規格(2001年版)のCD-ROMを新たに購入しました。1階の専用端末でご利用になれますので、利用を希望する方は、閲覧カウンターで申込みをしてください。

アグリゲータ系電子ジャーナル及びCSA(2次文献DB)トライアルについて(学術情報係)

アグリゲータ系電子ジャーナル ProQuest, EbscoHost と、2次文献データベース CSA (Cambridge Scientific Abstracts) のトライアルを実施しています。実施期間は、いずれも平成14年10月末日までです。各データベースの詳細は、図書館ホームページで紹介しています。図書館ホームページ「電子ジャーナル」からアクセスしてご利用ください。

図書館の利用状況

項目 / 年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
蔵書冊数 (冊)	153,035	162,765	169,583
和書	92,072	100,234	104,793
洋書	60,963	62,531	64,790
うち参考図書	9,004	10,952	17,054
研究図書	28,238	32,594	32,127
製本雑誌	36,813	38,374	39,385
年間受入冊数 (冊)	6,288	8,423	6,845
和書	3,599	5,644	4,701
洋書	2,689	2,779	2,144
蔵書雑誌タイトル数 (種)	3,640	3,907	4,201
和雑誌	2,140	2,373	2,638
洋雑誌	1,500	1,534	1,563
年間受入雑誌タイトル数 (種)	1,216	1,247	1,538
和雑誌	811	828	1,266
洋雑誌	405	419	272
入館者数 (人)	160,674	142,890	136,147
うち学外利用者	1,189	1,144	1,462
うち特別開館入館者数	42,109	37,873	33,423
館外貸出冊数 (冊)	35,216	30,740	28,998
施設利用者数 (人)	4,297	3,262	2,475
学内複写 白黒 (枚)	69,962	87,358	83,583
カラー (枚)	11,062	10,909	9,578
リーダー (件)	27	37	5
プリンター (枚)	339	288	152
図書貸借 受付 (冊)	366	313	253
国立大学等	321	280	231
私立大学	45	33	22
依頼	128	146	176

項目 / 年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
図書貸借 国立大学等	122	134	169
私立大学	6	12	7
文献複写 受付 (冊)	4,803	3,782	3,944
大学	4,092	3,442	3,920
その他	711	340	24
依頼 (件)	6,621	6,386	6,366
大学	6,126	5,871	5,762
その他	495	515	604
オンライン情報検索 (件)	209	113	86
JOIS	13	5	0
STN	151	67	57
NACSIS	41	40	27
DIALOG	1	1	2
参考質問 (件)	1,668	1,518	1,351
内容別 所在	326	273	338
事項	557	197	96
利用	785	1,048	917
身分別 教官	350	258	198
職員	69	46	65
学生	1,193	1,108	1,024
学外	56	106	64
形式別 口頭	1,494	1,351	1,263
電話	117	76	51
文書・メール	57	91	37
外国雑誌目次データベース (件)	1,994	825	999
雑誌検索	780	801	987
論文検索	1,214	24	12

-
14. 4.25 東海地区国立大学図書館協議会総会 (会場：岐阜大学)
出席者 附属図書館長、図書課長
-
14. 5.21 国立大学附属図書館事務部課長会議 (会場：学術総合センター)
出席者 教務部長、図書課長
-
14. 6.21 愛知図書館協会定期総会 (会場：愛知県図書館)
出席者 図書課長
-
14. 6.26 国立大学図書館協議会総会 (会場：鳥取大学)
～ 27 出席者 附属図書館長、図書課長
-
14. 7. 8 大学図書館職員長期研修 (会場：オリンピック記念青少年総合センター他)
～ 26 参加者 学術情報係 江口敏一
-
14. 7. 9 豊橋市図書館協議会 (会場：豊橋市中央図書館)
出席者 附属図書館長
-
14. 7.12 東海地区国立大学図書館長懇談会 (会場：名古屋大学)
出席者 附属図書館長
-
14. 7.24 図書館等職員著作権実務講習会 (会場：東京大学)
～ 26 参加者 学術情報係 美野部亜紀
-
14. 7.30 東海地区大学図書館協議会総会・研究集会 (会場：金城学院大学)
出席者 図書課長
-
14. 8. 8 高等専門学校及び技術科学大学図書館情報シンポジウム (会場：長岡技術科学大学)
～ 9 参加者 情報サービス係長
-
14. 8.23 豊橋市図書館協議会 (会場：豊橋市中央図書館)
出席者 附属図書館長
-
14. 8.26 法人格取得問題に関する附属図書館懇談会 (会場：東京大学)
出席者 附属図書館長、図書課長
-

豊橋技術科学大学附属図書館報「AΛHΘEIA」第24号 平成14年10月1日

■編集・発行 豊橋技術科学大学教務部図書課

■〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1 TEL. 0532-44-6562

FAX. 0532-44-6566